

もなくお墓につきました。

④ 村人「こちらでございます。」

村人は、竹のとびらを開いて、  
村人「どうぞ、お入りになってお参りください。」

と、言つて自分は外で、ひざをついて深々と礼をしています。

それを見た武士は、おどろきましました。

武士『そうか、着物を着かえたのは、私のためではなく、藤樹先生を敬つてのことだったのか。』



入り、藤樹先生のお墓に心静かに手を合わせてお参りをしました。

⑤ お参りが終わると、武士が村人に、たずねました。

武士「そなたは着物まで着かえて案内をしてくれたが、藤樹先生の親せきの方かな。」

村人は手を振つて言いました。  
村人「いいえ、私は親せきではあ



りません。汚れた着物で藤樹さんのお墓へは行けません。昔からみんな藤樹さんにはいろいろなことを教

村人は続けて言いました。

村人「親を大事にして、兄弟仲良く平和に暮らすことの大切さを知つたのは、藤樹さんのおかげなんです。だからいつも感謝しなければいけない」と、私の親も、常

日頃から言つて聞かせてくれました。」

と、答えました。

⑥ 武士は、初めはただ、藤樹先生のお墓をお参りしたいぐらいに思つていたのですが、村人の様子を見て武士はもう一度ていねいにお参りをしました。

武士「世間では、先生のことを、近江聖人と言っているが、本当の



聖人だというところが、今、ようやくわかりました。よく案内してくれました。本当にありがとうございます。」

武士は村人に対して、お礼を言いました。

村人「ようこそ、お参りくださいました。どうぞ、気をつけて、旅を続けください。」

武士は、もう一度ていねいに礼をすると帰っていききました。

⑦ 今日も小川村の人たちは、書院やお墓のお掃除をしています。



キク「昨日の風で、今朝は藤樹さんの書院の庭に落ち葉がたくさん落ちてきたので、お掃除に来たんですよ。」

キクさんがほうきで落ち葉を掃きながら、後からやってきた清助さんに言いました。

清助「それはご苦労さんです。私もこれから藤樹さんのお墓に。せっかくなお花をかざつてもらったのに、竹の囲いがだいぶ傷んできたので。ちよつと、竹やぶで竹を切つてきて、直そうと思つているんですよ。」

と、言つて清助さんは、竹を取り出かけました。

このように、藤樹先生が亡くなられてからも、小川村の人たちは、藤樹書院や、お墓のお世話を喜んでしていました。

⑧ 武士がお墓参りをしてから、五十年ほど過ぎた、明治十三年（一八八〇年）九月二十六日の夜、カーン！カーン！カーン！カーン！



小川村で火事を知らせる半鐘が、激しく鳴り響きました。村人たちはおどろいて、家の中から外へ飛び出しました。すると、強い風の中、火事で空が真っ赤に染まっています。